

「ケ文」の意味構造

小坂 光一

0. 序

本稿で問題にするのは次のような、終助詞「ケ」を伴った文である。このような文を本稿では「ケ文」と呼ぶことにする。この「ケ文」は何かを思い出したり、あることがらを確認したりする文において口語的によく用いられる。

- (1) あの頃よくお前と飲みに行ったっけ。
- (2a) ええと、どちらさんでしたっけ。

しかし、この助詞「ケ」は「タ形」と「ダ形」にしか付加できない。「タ形」の丁寧形「マシタ」は「タ形」であるから、これには付加できるが、「ダ」の丁寧形に相当する「デス」や一般的に「ダ形」と同じ意味を持つと思われる「デアル」は「タ形」でも「ダ形」でもないから、これとは共起しない。すなわち、常に「たっけ」と「だっけ」の組み合わせでのみ用いられる。

- (3a) そんなことあったっけ。
- (3b) そんなことありましたっけ。
- (4a) あしたまた会議があったっけ。
- (4b)?* あしたまた会議があるっけ。
- (2a) ええと、どちらさんでしたっけ。
- (2b) ええと、だれだっっけ。
- (2c) *ええと、どちらさんですっっけ。

しかも、(2a)や(4a)が示すように、前接する「タ形」は必ずしもいわゆる「過去」のことを意味するとは限らない。本稿の目的は、このようないわゆる「ケ文」の意味構造をいくぶんなりとも明らかにすることにある。ただし、本稿で取り扱うの

小坂光一

は歴史的考察ではない。あくまでも、現代日本語における「ケ文」の成立過程である。

なお、次のような文に(方言的に)用いられる「ケ」は「カイ」、「カエ」から派生したものであり、性質が異なると思われるので、考察の対象から外す。

- (5) 今日¹はたばこは買わんのけ? (今日¹はたばこは買わないのかい?)

1. 問題提起

すでに述べたように、「ケ」は「夕形」と「ダ形」にしか接続しない。思い出したり確認したりする内容がSZ(発話時)以前に成立した(はずの)ことである場合、すなわち「過去」のことがらである場合はそれ自体が「夕形」で表されるのが自然であるから、一見したところでは「～たっけ」の形で現われることに問題がなさそうに思われる。しかし、「ケ」が「u-形」¹に接続できないということとの関連で考えるならば、問題はそれ程簡単ではない。

- (1) あの頃良くお前と飲みに行ったっけ(なあ)。
(2) そんなことがずいぶん前にあったっけ(なあ)。
(3a) *あれ? あした東京へ行くっけ?
(4a) *あしたまた会議があるっけ?

すなわち、思い出したり確認したりする内容がSZ(発話時)において未成立の内容の場合であっても、「ケ」は「夕形」か「ダ形」にしか接続できない。動詞句が「夕形」や「ダ形」でない場合は「(の)だっけ」あるいはその「夕形」である「(の)だったっけ」になる。

- (3b) あれ? あした東京へ行くんだっけ?
(3c) あれ? あした東京へ行くんだったっけ?
(4b) あしたまた会議があったっけ?
(4c) あしたまた会議があるんだっけ?

¹ 一般的には「ル形」と呼ばれるものであるが、正確を期するために本稿では「u-形」と表現する。

(4d) あしたまた会議があるんだったっけ？

未成立の内容を表す命題の存在を、「ノダ」を用いずに直接「タ形」で表現できるのは、その動詞(句)が^gstatisch(静的)な場合のみである。従って、動詞(句)が dynamisch(動的)な場合は「V のだっけ」あるいはその「タ形」である「V のだったっけ」になる。²

(3d) *あれ？あした東京へ行ったっけ？(「行く」= dynamisch)

(3b) あれ？あした東京へ行くんだっけ？

(3c) あれ？あした東京へ行くんだったっけ？

(4b) あしたまた会議があったっけ？(「ある」= statisch)

何故「ケ文」は「～たっけ」、「～だっけ」の形でしか使用されないのであろうか。また、「～だっけ」が許容されるのに「～ですっけ」や「～であるっけ」が許容されないのは何故であろうか。これらの問題はすでに論じた「発見・確認・思い出しのタ形」の意味構造や「(の)だ」の意味構造などとも関わりあっているように思われる。

2. 仮説

小坂(2002)³などにおいて我々は「発見・確認・思い出しのタ形」に関して、以下のように記述した。

- 1) 「発見・確認・思い出しの「時」はSZ(発話時)である。
- 2) この種の「タ形」(過去形)はSZ(発話時)以前にすでに当該の命題が存在していたことを表現する。
- 3) 従って、その命題をPで表すならば、基本構造は「Pのだった」である。
- 4) その命題文中の動詞句が^gstatisch(静的)であれば、すなわち、主文(「～のだった」の動詞句(これは常に「のだ」であるから常に^gstatischである)と命題文中の動詞句の双方が^gstatisch(静的)であれば、2つの動詞句は融合し、命題文の「時称以外の部分」と主文の時称(「タ形」)が表面に残る。⁴

² 小坂光一：『「成立」と「存在」』、同学社 2002、S. 79-101。

³ 同上。

小坂光一

5) 命題文中の動詞句が dynamisch(動的)であれば、この融合は行われずに、「のだった」も表層に残る。

本稿においても、基本的にこの考え方を踏襲するが、「ケ」は「発見」とはあまり関係ないように思われるので、本稿では「(発見・)確認・思い出しのタ形」もしくは「確認・思い出しのタ形」と呼ぶことにする。

「ケ」は表面的に見た場合、前接部分が「確認・思い出しのタ形」であれ、通常の「過去」(SZ 以前における事象の成立、状態の存在)であれ、とにかく「タ形」であればそのまま接続することができる(「~たっけ」)。そして、前接する部分が「タ形」以外の場合は「(の)だ」を介して、「(の)だ」そのもの、もしくはその「タ形」(のヴァリアンテ)に接続する(「~(の)だっけ」/「~(の)だったっけ」/「~(の)でしたっけ」など)。

助詞「ケ」は助動詞「ケリ」から派生したと言われる。従って、「ケ」には何らかの形で、現代日本語の「タ」の用法が内在している可能性が考えられる。「ケリ」が「ある事態/状態が過去において存在した」ことを意味することから、「ケ」は何かの「既存性」と関係していることが想定される。その想定を出発点として、この「ケ」が「タ形」と「ダ形」にしか付加できない理由を探るために次のような仮説を提示してみる。

仮説 1

「ケ文」は、ある[命題]Pが既存であること(これは「(ノ)ダ文」で表される)を再確認する働きを持つ。

従って、「ケ」は基本的には「(ノ)ダ文」(「~(の)だ」/「~(の)だった」)に付加される。

「ケ文」(=[命題]Pの存在/既存+再確認)の構造として

$$P + \left[\frac{\text{〔(の)だ/のだった〕}_1}{P \text{ の存在/既存}} + \left[\frac{\text{〔(の)だった(か)〕}_2}{P \text{ の存在/既存の再確認}} \right] \right.$$

が想定される。

⁴ 小坂(2002)では触れなかったが、命題文中の BZ(被観察時)が「発話時以前」にある場合は、動詞句が statisch(静的)であっても、「のだった」の助けが必要となる。

昨日会議があったんだった。

上記の、「ある[命題]Pが既存であることが(ノ)ダ文で表される」という記述はすでに論じた以下の点を基本にしたものである。

1) [命題]PのSZ(発話時)における存在を問う疑問文には「~のか/~のですか」(=「のだ」/「のです」+「か」)が使われる。

- (1) A:今日は早く寝なければならない。
B:明朝、どこかに行くんですか。
[明朝、どこかに行く]Pのだ+か

2) 「(発見・)確認・思い出しのタ形」は「のだった」(との融合)から派生する。すなわち、[命題]PがSZ(発話時)以前に存在していたことを意味する。

- (2) そうだ、明日も会議があった。
[明日も会議がある]Pのだった

3) [命題]PのSZ(発話時)における存在を条件(前提)とする条件節には「(の)ならば」(=「(の)だ」の仮定形)が使われる。

- (3) 彼は、明日来る(の)なら(ば)今日中に電話してくるだろう。
[彼が明日来る]PがSZ(発話時)において既存であることを条件(前提)とした推定。「(の)なら(ば)」=「(の)だ」の仮定形

4) ([命題]Pの非存在を表す場合の)命題否定は、[命題]Pと「のでない」(=「のだ」の否定形)の融合から派生する。

- (4) 2人の幹事のうちのどっちかがいなければ会は始められないよ。
[2人の幹事のうちのどっちかがいる]Pのでなければ

従って、これらの考えに基づけば、命題PのSZ(発話時)における存在もしくはSZ(発話時)以前における既存の再確認を表す(と想定された)「ケ文」の基本形は[P+(の)だ/(の)だった+のだった(か)]であることになる。

- (5a) クジラは哺乳類だっけ？

小坂光一

- (5) あした会議があるんだっけ。
([[あした会議がある]Pのだった]のだったか]

また、(4a)のところで「[あした会議がある]PがSZ(発話時)以前から存在する」の部分を「[あした会議がある]PがSZ(発話時)において存在する」に変えればこの部分は「[あした会議がある]Pのだ」になり、「のだ」も(融合せずに)残存する。従って、次の文(6)が成立する。

- (6) あした会議があるんだっけ。
([[あした会議がある]Pのだ]のだったか]

疑問詞(W)の入った例を挙げてみよう。

- (7) あの、誰だったっけ。
(7a) [あの人はNNだ]PがSZ(発話時)以前から存在する
[あの人はNNだ]Pのだった
(7b) Pの内部の「だ」は *statisch*(静的)なので融合が行われ(得)る
[あの人はNNだ]Pのだった [あの人はNNだった]
(7c) [[あの人はNNだ]Pのだった](=[あの人はNNだった])の再確認
~ [[あの人だ]Pのだった]のだったか [[あの人はNNだった]の
だったか]
(7d) 融合により
[あの人はNNだった]ケ
(7e) NNのW化⁶
[あの人は誰だった]ケ

(7b)の融合は *obligatorisch*(義務的)ではない。従って、融合の行われない文も存在する。

- (8) あの、誰なんだっけ。
([[あの人だ]Pのだった]のだったか]

⁶ どの段階で「W化」を想定すべきかについては未研究であるため、本稿では触れないことにする。

また、(7a)のところで「[あの人は NN だ]P が SZ(発話時)以前から存在する」の部分で「[あの人は NN だ]P が SZ(発話時)において存在する」に変えればこの部分は「[あの人は NN だ]P のだ」に変わるので、次の文も成立する

(9) あの人の、誰なんだっけ。

(9a) [[あの人は NN だ]P のだ] のだったか]

(9a)において「だ」と「のだ」の融合が行われれば次の文も成立する。

(10) あの人の、誰だっけ。

「だ」と「のだ」の融合が行われている(10)は正しい文であるが、(6)の場合は、「ある」と「のだ」の双方が *statisch*(静的)であるにもかかわらず、両者間の融合が行われれば非文もしくは許容しにくい文⁷が生じる。

(6)?* あした会議があるっけ。

すなわち、アウトプットは必ず「だっけ」もしくは「たっけ」にならなければならないということである。従って、融合の仕方についてもさらに詳しく考察する必要がある(第6章参照)。

4. 「夕形」と「ケ」

第3章では主として「確認・思い出しの「夕形」に「ケ」が付加される過程について述べた。

(1) あしたも会議があったっけ？

ここではさらに、命題文そのものが「夕形」で表されている文、すなわち、命題文内部の BZ(被観察時)が SZ(発話時)以前にある文について述べる。

(2) 俺、昨日そんなこと言ったっけ？

⁷ 「許容しにくい」という表記に関しては本稿の最終章「7. 追記」参照。

小坂光一

仮説 1 に従えば、(1)と(2)の基本構造は以下のようになる。

- (1a) [[あしたも会議がある]のだった]のだった(か)
あしたも会議があるんだったっけ？
- (2a) [[俺、昨日そんなこと言った]のだった]のだった(か)
俺、昨日そんなこと言ったんだ(った)っけ？

我々は小坂(2002)で「タ形」に関して次のような仮説を立てた。⁸

dynamisch(動的)な動詞句の(過去を意味する)「タ形」は、ある事象が SZ(発話時)以前に成立したこと(すなわち、事象の SZ 以前における存在)を表す

statisch(静的)な動詞句の「タ形」もやはり当然のことながら、命題の既存(「確認・思い出し」の場合)以外に「状態の SZ(発話時)以前における存在」を表すから、一般化して言えば、「BZ(被観察時)が SZ(発話時)よりも前にある場合のタ形」(通常の「過去形」)は「事象/状態の既存」を表す、ということになる。

従って、「タ形」で表されている文の場合はすでに(命題/事象/状態の)「既存性」が表されているから、「既存性」を明示するために直後に付加される「ノダ」は fakultativ(随意的)であるということになる。「ケ」が「ダ形」で表現される文に直接付加される場合についても同様のことが言える。

- (3) クジラは哺乳類だっけ？
[クジラは哺乳類だ]_Pのだった(か)
- (3a) クジラは哺乳類なのだっけ？
[[クジラは哺乳類だ]_Pのだ]のだった(か)

「ダ文」は命題そのものであり、しかも「ダ」は durativ-statisch(継続的・静的)⁹であるから、SZ(発話時)においてその命題が存在するということは SZ(発話時)以前か

⁸ 小坂(2002)の第1章。なお、ここでも、この仮説を完全に証明するには至っていないが、この仮説を想定することにより、さまざまな現象が説明可能になることを示した。

⁹ 動詞句の分類に関しては小坂(2002) S. 83f.などを参照していただきたい。特に、statisch(静的)な動詞句を durativ(継続的)と punktuell(点的)に分類したことに関する詳細については Kosaka(1991): „Statische Verbalphrasen im Deutschen und im Japanischen“, in: *Akten des VIII. Kongresses der IVG*, München 参照。

らその存在が継続しているということでもある。

換言すれば、「タ」や「ダ」への「ノダ」の付加は fakultativ(随意的)になる。これは、「タ」/「ダ」と「ノダ」の一種の「融合」ということができよう。これは仮説1の中の

「ケ」は基本的には「(ノ)ダ文」「~(の)だ」/「~(の)だった」に付加される

と抵触するものではない。ただし、仮説1の中の

「ケ文」は、ある[命題]_Pが既存であること(これは「(ノ)ダ文」で表される)を再確認する働きを持つ。

は次のように修正する方がいいと思われる。

「ケ文」は、ある[命題]もしくはある[事象]/[状態]が既存であること(これは「(ノ)ダ文」で表される)を再確認する働きを持つ。

5. モダリティ要素

次に「~であるっけ」、「~ですっけ」が許容されない理由について述べたい。まず、次の文を見ていただきたい。

(1) 私、昨日そんなこと言いましたっけ？

(1)の文それ自体は特に問題のない文である。しかし、上述したような成立過程を考えるならば問題が生じる。

(1a) [私がそんなことを言いました]_Pのだ+ケ

*私、そんなこと言いましたのだったっけ？

この問題は恐らく、既存であると考えられている命題文ないしは事象/状態を表す文が丁寧形になっている点にあると思われる。「丁寧」のような、いわゆる(広義の)モダリティ要素は命題文中にではなく、文の末尾に付加されるのが自然であるからである。従って(1)は、(1a)からではなく、次の(1b)から派生したと考える方が自然であろう。

小坂光一

- (1b) [私が昨日そんなこと言った]のでしたケ
私、昨日そんなこと言ったんでしたっけ？

しかし、「のでした」の代わりに「のです」を使うと非許容文が生じる。

- (1c) [私が昨日そんなこと言った]のですケ
*私、昨日そんなこと言ったんですっけ？

ここで再び仮説1の を見てみよう。

仮説1の

「ケ文」(=[命題]Pの存在/既存+再確認)の構造として

$$P + \left[\frac{[(\text{の})\text{だ}/\text{の}\text{だった}]_1}{P \text{の存在/既存}} + \frac{[(\text{の})\text{だった}(\text{か})]_2}{P \text{の存在/既存の再確認}} \right]$$

が想定される。

これは「ケ」文の内部に「ノダ」と「タ」の両方が内包されているという考え方である。
そして、これにさらに次の仮説を加えてみよう。

仮説2

(広義の)モダリティ要素は文尾優先で付加される。

モダリティ要素が文尾に付加ができない場合は順次その直前に移動する。

仮説1の 及び仮説2を適用すれば、(1)の成立過程は以下のようになる。

- (1) 私、昨日そんなこと言いましたっけ？
[[[私が昨日そんなことを言った]のだ/のだった]のだった(か)]丁寧]
「丁寧」の前方移動
[[[私が昨日そんなことを言った]のだ/のだった]のでした(か)]
[のだ/のだった]と[のでした(か)]の「融合」により、「丁寧」がさらに
前方に移動
[[私が昨日そんなことを言った]のでした(か)]

[言った]と[のでした(か)]の「融合」により、「のでした」の中の「ノダ」が見えなくなるため、「丁寧」がさらに前方移動

[私が昨日そんなことを言いました]ケ
私、昨日そんなことを言いましたっけ？

この方向で考察すれば、「タ形」+「ケ」(=「たっけ」)の成立過程は説明できそうに思われる。次章では、仮説1の

「ケ」は基本的には「(ノ)ダ文」(「~(の)だ」/「~(の)だった」)に付加されると合わせて、「ケ文」の成立過程をさらに具体的に考察することにする。

6. 「ケ文」の成立過程

これまでの考察を元にした場合、「ケ文」の成立過程は以下のように考えるのがいいように思われる。

1) 「ケ文」(「~だっけ」/「~たっけ」)の意味構造を次のように考える。

「ケ文」は P + [のだ/のだった]₁ + [のだった(か)]₂ が融合したものである。
P の存在/既存 P の存在/既存の再確認

2) [のだった(か)]₂ の部分にはさまざまバリエーションがある。

1. のだった(か) (=「のだった」 + [M \emptyset])¹⁰
 2. のであった(か) (=「のであった」 + [M \emptyset])
 3. のでした(か) (=「のだった」 + [丁寧])
 4. のでありました(か) (=「のであった」 + [丁寧])
- など

3) 「ケ文」の成立に有効な「融合」としては以下のようなものが想定される。

- a) [確認・思い出し]の融合
[statisch]P + [のだった] [P た]

¹⁰ [M \emptyset]は「のだった(か)」のうしろに付くモダリティ要素が0(ゼロ)であることを意味する。

- b) 「ダ」「ダ」の融合
[のだ/のだった]₁ + [のだった(か)]₂ [のだっけ]/[のだったっけ]
- c) 「ダ」「ダ」「ダ」の融合
[~だ]_P + [のだ/のだった]₁ + [のだった(か)]₂ [なのだっけ]/[なのだったっけ]/[だっけ]
- d) 「タ」「タ」の融合
1. [Pた] + [のだった(か)]₂ [たっけ]
(Pの動詞句が *statisch* であり、初めに確認・思い出しの融合により[Pた]が生じた場合。Pの内部は「タ形」ではない)
 2. [~た]_P + [のだ/のだった]₁ + [のだった(か)]₂
[たのだっけ]/[たのだったっけ]/[たっけ] (Pの内部が「タ形」の場合)
- 4) モダリティ要素は最後の[のだった(か)]₂ に付く。[のだった(か)]₂ + M が「のだったか」以外(「のであった(か)」「のでした(か)」「のでありました(か)」など)のとき、換言すれば、([丁寧]などのような、M₀ 以外の)[M]が付加された場合は、(この[M]は[のだった(か)]₂ の「タ」に付加されるものなので)「ダ」「ダ」の融合が行われても、[のだった(か)]₂ 中の「タ」と[M]は表層に残る。

以下、上述の考察をもとにして、「ケ文」のさまざまなヴァリエーション、すなわち、「~だっけ」、「~だったっけ」、「~たっけ」、「~でしたっけ」、「~ましたっけ」などの成立過程を具体的にみることにする。

[u-形]_P + [のだ]₁ + [のだった(か)]₂ の融合結果は「のだっけ」もしくは「のだったっけ」になる。すなわち、[のだ]₁、[のだった(か)]₂ のうちのいずれかの「のだ」が表層に残る(「ダ」「ダ」の融合)

- (1a) あした会議があるんだっけ。([のだ]₁ の「のだ」が表面に残った場合)
- (1b) あした会議があるんだっけ。
([のだった(か)]₂ の「のだった」が表面に残った場合)

[u-形]P + [のだった]₁ + [のだった(か)]₂ の融合は「のだったっけ」になる(2つの「のだった」のうちの最低1つが表面に残る。「ダ」「ダ」の融合)

(1c) あした会議があるんだったっけ。(結果的には(1b)と同じになる)

[u-形]P が statisch な場合は [u-形]P + [のだった]₁ の融合が行われて [P た] になり(り得)るから、まず [u-形]P + [のだった]₁ の融合(確認・思い出しの融合)が行われて [P た] + [のだった(か)]₂ になり、さらに次の融合が行われて「P たっけ」になる。すなわち、「タ」が重なる場合は最低1つが残る(「タ」「タ」の融合)。

(1d) あした会議があったっけ。

[あした会議がある] + [のだった]₁ + [のだった(か)]₂
└──────────┘
あった

[あした会議があった] + [のだった(か)]₂

あした会議があったっけ

[～だ]P + [のだ/のだった]₁ (存在/既存) + [のだった]₂ (既存の再確認) のように「だ」のみが重なった場合は最低1つの「だ」が残る。その場合、[～だ]P の中の「だ」は必ず残る(「ダ」「ダ」「ダ」の融合/「ダ」「ダ」の融合)。

(2a) クジラは哺乳類だっけ。([～だ]P 中の「だ」のみを表面に残した融合)

(2b) クジラは哺乳類なんだっけ。([～だ]P 中の「だ」の他に、[のだ]₁ を表面に残した融合)

(2c) クジラは哺乳類なんだったっけ。

([～だ]P 中の「だ」の他に、[のだった]₁、[のだった(か)]₂ のいずれかの「のだった」が表面に残った融合)

(2d) クジラは哺乳類だっけ。

(P の動詞句が statisch なので、初めに [～だ]P と [のだった]₁ の融合(発見・確認の融合)が行われて [P た (=「～だった」)] になり、その後で [P た] と [のだった(か)]₂ の融合(「タ」「タ」の融合)が行われた場合)

P の動詞句が「タ形」の場合はすでに事象/状態の既存が表されているので、[のだ/のだった]₁ の存在は fakultativ (随意的) になる。また、「タ」が重複する場

合は最低1つの「タ」が残る(「タ」「タ」の融合)。

- (3a) 俺、昨日そんなこと言ったんだっけ。([のだ]₁の「のだ」が表面に残った場合。「ダ」「ダ」の融合)
- (3b) 俺、昨日そんなこと言ったんだっけ。([のだった]₁もしくは[のだった(か)]₂のいずれかの「のだった」が表面に残った場合。「ダ」「ダ」の融合)
- (3c) 俺、昨日そんなこと言ったっけ。
([のだ/のだった]₁の存在が fakultativ(随意的)であるため、その部分がまず消去され、次に[~た]_Pと[のだった(か)]₂の融合(「タ」「タ」の融合)が行われた場合)

モダリティ要素は最後の[のだった(か)]₂に付く。

[のだった(か)]₂ + M が「のだったか」以外(「のであった(か)」「のでした(か)」「のでありました(か)」など)のとき、換言すれば、([丁寧]などのような)[M]が付加された場合は、(この[M]は[のだった(か)]₂の中の「タ」に付加されるものなので)「ダ」「ダ」の融合が行われても、[M]を残す限り、[のだった(か)]₂の中の「タ」は表層に残る。

- (4) クジラは哺乳類でしたっけ。
[クジラは哺乳類だ]_P + [のだ/のだった]₁ + [[のだった(か)]₂ + [丁寧]]
「ダ」「ダ」の融合
[クジラは哺乳類だ]_P + [のだった(か)]₂ + [丁寧]
「ダ」「ダ」の融合
[クジラは哺乳類だった(か)] + [丁寧]
[丁寧]の前方移動
クジラは哺乳類でしたっけ
- (5) 明日会議がありましたっけ。
[明日会議がある]_P + [のだ/のだった]₁ + [[のだった(か)]₂ + [丁寧]]
発見・確認の融合
[明日会議があった] + [のだった(か)]₂ + [丁寧]
「タ」「タ」の融合

[明日会議があった(か)] + [丁寧]
[丁寧]の前方移動
明日会議がありましたっけ

- (6) 私、昨日そんなこと言いましたっけ。
[私が昨日そんなことを言った]_P + [のだ/のだった]₁ + [のだった(か)]₂
+ [丁寧]
「ダ」「ダ」の融合による[[のだった(か)]₂ + [丁寧]]の残存
[私が昨日そんなことを言った]_P + [のだった(か)]₂ + [丁寧]
「タ」「タ」の融合
[私が昨日そんなことを言った(か)] + [丁寧]
[丁寧]の前方移動
私が昨日そんなこと言いましたっけ

7. 追記

東海地区特有の現象か、比較的若い人特有の現象かについては調査していないが、最近次のような(筆者には少々違和感のある)発話を耳にすることがある。¹¹

- (1) 明日授業あるっけ?
(2) 明日授業ないっけ?

これは、ある特定の場合は「～たっけ」、「～だっけ」以外の組み合わせで「ケ文」が使用可能であることを意味する。この「特定の場合」とは

$$P + \frac{[\text{のだ/のだった}]_1 + [\text{のだった(か)}]_2}{\begin{array}{cc} P \text{ の存在/既存} & P \text{ の存在/既存の再確認} \end{array}}$$

の中のPの動詞が「ある/ない」の場合である。然らば、この「ある/ない」の特徴は何であろうか。それは次の2つであろう。

1. アスペクト的には *statisch*(静的)である。

¹¹ これらの文は前章までは非許容文もしくは許容しがたい文として扱ってきた。

小坂光一

2. 「存在/非存在」を意味する。

すなわち、「あるっけ」はPの内部にすでに「存在」を含んでおり、次の構造を持っている。

$$(3) \quad \underbrace{[\text{ある}]_P}_{\text{存在 } P} + \underbrace{[\text{のだ/のだった}]_1}_{P \text{ の存在/既存}} + \underbrace{[\text{のだった(か)}]_2}_{P \text{ の存在/既存の再確認}}$$

また、「ないっけ」は次の構造を持っている。

$$(3) \quad \underbrace{[\text{ない}]_P}_{\text{非存在 } P} + \underbrace{[\text{のだ/のだった}]_1}_{P \text{ の存在/既存}} + \underbrace{[\text{のだった(か)}]_2}_{P \text{ の存在/既存の再確認}}$$

要するに「存在」「非存在」が重複している。このような場合に『存在』『存在』の融合が行われる、と考えることができる。

「丁寧」のようなモダリティ要素が付加された場合はこれまでの考察通り、「タ形」になる。すなわち、モダリティ要素は最後の[のだった(か)]₂に付くので、[のだった(か)]₂の中の「タ」は表層に残る。

- (4a) 明日授業ありましたっけ？
- (4b) * 明日授業ありますっけ？
- (5a) 明日授業ありませんでしたっけ？
- (5b) * 明日授業ありませんっけ？
- (5c) * 明日授業ありませんですっけ？
- (5d) * 明日授業ないですっけ？

Pの内部の動詞が「タ形」であり、かつ「ない」が「非存在」ではなくて「否定」を意味する場合の「～なかったっけ」は複数の意味構造を持つ。

- (6) 俺、そのこと昨日言わなかったっけ。
- (6a) $[\text{そのことを昨日言わなかった}]_P + \underbrace{[\text{のだった}]_1}_{P \text{ の存在/既存}} + \underbrace{[\text{のだった(か)}]_2}_{P \text{ の存在/既存の再確認}}$
- (6b) $[\text{そのことを昨日言った}]_P + \underbrace{[\text{のでなかった}]_1}_{P \text{ の非存在/非既存}} + \underbrace{[\text{のだった(か)}]_2}_{P \text{ の非存在/非既存の再確認}}$

ここでも、「否定命題」と「命題否定」の問題が生じることになる。「否定命題」と「命

題否定」については本稿ではこれ以上述べないが、¹² 「融合」を減ずることにより意味の違いが少しくはっきりする。

(6a') 俺、そのことを昨日言わなかったんだっけ

(6b') 俺、そのことを昨日言ったではなかったっけ。

(6a)は[自分がそのことを昨日言わなかった]という命題の「存在」の「再確認」であるし、(6b)の方は[自分がそのことを昨日言った]という命題の「存否」の「再確認」である。

¹² 「否定命題」と「命題否定に」関しては小坂(2002)のS. 139ff. 参照。

